



三段崎景親。六世三段崎景行。七世三段崎尙景。稱孫三郎也。世々居于江州山本村。故孫三郎尙景之男稱山本左兵衛。子孫以山本爲稱號也。左兵衛之男山本將監。天文十八年八月於江州鳥居本。爲淺井家戰死。將監之男山本新左衛門任于越前朝倉家。爲先手足輕隊將。天正元年八月於同國刀根山戰死。新左衛門娶朝倉家士長崎大乗坊娘。生男子。稱山本久助。生長後於越前府中。任于佐々内藏助成政。天正十二年以祿原彌助之吹擧。任于利家卿。賜家祿百二十石。爲馬廻組士。歷任于利長・利常兩卿。元和七年三月十九日以疾歿。長男五兵衛繼遺跡。賜家祿如故。寛永十六年爲富山附庸之士。任于侍從利次君。次男瀬兵衛任于利常卿。明曆三年賜家祿百石。爲近侍。建一家。雖然依病身辭職。元祿六年七月十三日以病歿。一男源太郎惟明。後稱源右衛門基庸。延寶五年三月綱紀卿爲步士。被命書物役。元祿七年繼家。賜父之遺知百石。正德三年七月以懇命。加恩百石。賜二百石。享保十年七月十五日以病歿。とありて、其れより世々二百石を家祿となし、家系連綿す。按ずるに、山本久助が采地、慶長十八九年士帳には、馬廻組加州百石山本

久助と見え、後二十石加恩ありしか。又同士帳に馬廻組加州三百石三段崎猪助、元和元年士帳に馬廻組三百石三段崎小兵衛、寛永四年士帳にも同じく見ゆ。同十九年小松士帳に、三百石三段崎孫市とあり。混見摘寫に、三田崎孫市とて三百石取る馬廻の家禮三藏と云ふ者の事を記載して、孫市が屋敷は田町にて、子供の代斷絶すとあり。右三段崎氏は則ち山本氏と同姓にて、其の家祖詳かならずといへども、山本氏の家祖三段崎は近江國の地名ならんか。山本氏も明治廢藩の際本苗に復し今は三段崎某と稱すといへり。

○山本久助傳話

久助は山本瀬兵衛が父にて、山本源右衛門基庸の祖父なり。藩祖利家卿に奉仕し馬廻組なり。村井長明が筆記せし陳善録一名亞細に云ふ。秀頼様伏見より内裏へ御参内の刻、利家様は御車に秀頼様をいだきまゐらせられ御越被成。御歸城の時分、伏見備前中納言殿上の城下にて、御供の衆大名小名馬よりおり、下々入込不申やうに、御車際へは大納言様衆許警固被仰付、小姓馬廻跡を押申時分、我もくくと入込押合ける時、長岡越中殿を大納言様御馬廻山本久助と

申者つらをはりたり。越中殿とはゆめく不<sub>レ</sub>知ゆえ也。齋藤喜右衛門儀も手つだひ申たり。肥前様、越中殿をよその者とのいひ事と思召、御車のさきより御かへりみ被成候へば、右之通御覽候て、知らぬ躰に被成、又御先へ御越候。其夜肥前様御意色々御物語候事とあり。肥前様は利長卿をいへり。按ずるに、右は江村專齋の老人雜話に、秀頼五歳の時参内有、伏見より行列をなす。太閤は二三日前に入浴有て、中立賣最上殿の屋敷におはします。参内の日に迎に御出あり。室町通りを南へさす。見物群集す云々。諸大名は大房の馬に乗り二行に供奉す。是は聚洛の成終りて後、中一年ありての事也。といへり。秀頼の誕生は文祿三年四月九日とあれば、五歳の時は慶長三年なり。源右衛門基庸が筆記せし微妙公夜話録の書末に云ふ。

一、高德公・瑞龍公御兩君の御厚恩は、高德公御夜話に載することく、伏見にて細川越中守殿と祖父久助口論の時、越中守殿は御縁者なれば、久助切腹も可被<sub>レ</sub>仰付處に、いかなる思召にや御有免故に子孫も繼きぬ。是第一の御厚恩成るべし。